

実践する「愛と生命」

——「利他主義」の中に私を見出して——

ろう せい こう

妻 正綱 Grace Z. G. Lou

聞き手：佐多保彦 株式会社東機質 代表取締役社長

佐多：妻さんは中国黒龍江省のお生まれで東京をベースに「書」と「画」の創作活動を国際的に展開されていますが、世に出るきっかけはなんだったのでしょうか？

妻：私は3歳の頃から書家の父に厳しい指導を受けていました。紙は高価ですから、新聞紙を使ったり、また自分で考えた練習方法ですが、コンクリートの床の上に水で書の練習をしていたこともあります。この練習方法は、最近みなさんがとり入れています、私が最初なのです。肘が固定されないで、スケールの大きな書になるというメリットもありました。そして12歳のときに父と栄宝齋（書紙や筆を売っている北京の文房具の専門店）に紙を買いにいったのですが、「そんなにたくさん誰が使うのか」と聞かれて、父が「娘が使うのです」と答えて驚かれました。書の紙というのは決して安い物ではありませんから、そんな小さい娘に使わせることが不思議だったのですね。そのときたまたま書の代表团が栄宝齋を訪れて書の交流会のようなものがあり、みなさんの前で書を披露しました。そうしたらみなさんびっくりされて、たった一日で天才少女として有名になってしまいました。

佐多：日本に来られたのはいつ頃ですか？

妻：19歳のときでしたから、もう15年になります。行き詰まりを感じていて、それで中国を離れる決心をしました。中国以外では日本が一番初めに私を評価してくれた国でしたから、日本に渡ることになりました。汽車が香港に向かって発車するときに、父には「成功しなかったらもう戻らない」とはっきり告げました。

佐多：ここ数年、「書は人なり、絵は心の声」と説かれながら、「愛と生命」というテーマで作品を発表されていますが、なにか理由があるのでしょうか？

妻：30歳になった頃にマネージメントをお願いしていた方が、私の人脈とか色々なものを持って独立してしまい、裏切られて私は深く傷つきました。しばらくはもう死んだほうがいいかなと、思

い詰めるくらい辛い時期でした。でも死ねませんでした。そしてそのときに、生きるということと愛について深く考えたのです。自分がこうしてやられていられるのも、ここまで色々な縁があって、色々な方々に助けられて、愛の上に自分が成り立っているということに気が付いたのです。

佐多：夢でなにか見られたそうですね。

妻：夢の中で占い師の女性が出てきて、おみくじをひかされたのです。2つの漢字が書かれていて、孤独の「孤」と「波」でした。多分今考えてみるとこうだろうと思うのですが、書や絵をかくという作業はたった一人です。小さい頃からずっと一人で練習をしてきて、私はずっと孤独に耐えてきました。そういう意味での「孤」と、私の人生はとても波があるという意味での「波」ですね。今度自叙伝を出すことになっていて、表紙の帯にも書くことになっていますが、「天国に長くいると地獄の味がする。地獄に長くいると天国の味がする」という言葉があります。小さい頃から多くの方に支援されてここまでやってきたけど、辛い時期にその恵まれていた分だけ地獄も味わったというか、それからは常に原点にすることが大切、ということを実感しているのです。占い師の女性にこうも言われました。「あなたの人生は他人のための人生なのだから、余計なことを考えて思い煩わなくてもよい」と。それで目が覚めて、とても気持ちが楽になったのです。

佐多：他人のことをもっと考えなさいというメッセージ、「利他主義」ということですね。ドライ・ラマから直接同じことをうかがったことがあります。

妻：他人のためになにかをしてあげたいという気持ちは昔から強かったのですが、自分の人生を振り返ってみて、父の指導がなかったら、そして国が支援してくれなかったら、今の私はなかったと思います。それで、私も才能ある子供たちを応援しようと考えたのです。私もそうでしたが、中国では才能ある子は豊かな家にはいないのです。そこで「正綱芸術教育発展基金」を98年に中国教育部（日本の文部科学省にあたる）の協力の下に設立しました。基金



龔 正綱 / ろう・せいこう Grace Z.G.Lou

1966年：黒龍江省生まれ

1979年：12歳にして、中国政府の特別許可により中央美術学院に入学。書家として本格的な活動を開始する

1981年：カナダのオタワで初の海外個展を開催

1986年：19歳で来日

日中文化の架け橋として書画展を開催するとともに、「正綱芸術教育発展基金」を設立するなどして、後進の指導にも力を入れている。作品は30ヶ所以上の博物館、美術館に収蔵されている

2001年7月：自伝『心』を世界文化社から出版予定



では「正綱芸術実験学校」を作り才能ある子供に芸術を教えています。

佐多：学校として成功すれば、これから全国展開していくわけですね。そうやって龔さんがお父様に指導を受けたように、子供たちの教育にも力を入れておられるわけですが、やはり書やその他の芸術にしても、才能が一番大切なのではないですか。

龔：そうですね。人間は気付いていないだけで、一人一人違う才能を持っています。しかし、才能があるだけではだめで、やはり教育や訓練が必要です。今の私があるのは父の指導のおかげで、父には感謝し、また尊敬もしていますが、父に会うと父の厳しい指導のこと、辛いことを思い出して、今でも打ち解けることができません。でもあの指導がなければ忍耐力もなく、ここまでこられなかったと思います。

佐多：今、日本でも教育に関して色々言われていますが、やはり大事なものは家の教育ですね。親というのは子供をみていないといけないと思います。この子はどんな才能を持っているのか、もっと親が子供をみる訓練をしなくちゃいけない。近藤千恵さんという方が、^{近藤千恵さん}「親業訓練」の活動の創始者である米国のトマス・ゴードン博士の意志を生かして、日本でも80年に親業訓練協会^(注)を設立し、自ら理事長としてご活躍になっているのですが、今更ながらそのお仕事の大切さを思い知らされています。

龔：そうですね。子供が小さい頃将来なりたいと思っていた夢から、大きくなるにつれてどんどん遠くなっていきます。子供のなにかになりたいという夢は親子が一つになって育んでいきたいものですね。

佐多：実際に学校で書を教えたりされるのですか？

龔：いいえ、基本的には教えません。細かく教えるよりも、子供たちの精神的な支えになれればいいと考えています。今苦しくても、20年後は私のようにこうやって自分の夢を実現できますよ、という具体的な存在として私がいればいいかなと。

佐多：卒業していく子供たちのこれからの活躍を考えると楽しみですよね。龔さんはそうして世界中で認められるようになったわけですが、自分の書いた一筆一筆に値段がつくと考えてみると不思議な感じがしませんか？

龔：私の作品の値段は日本でもアメリカでも中国でも全く同じにしています。父に知り合いには安く書いてやって欲しいと頼まれることがあります。これは絶対にしません。私の作品の値段は私がつけているわけではなく市場がつけているものですが、私の作品を正当に評価して買って戴いているお客様に対して、私にはその価値を維持する責任があります。同じ理由で、自分が納得できない作品はすべて廃棄します。私はパブルのときでも自分の作品の価格を高くはしませんでしたし、世の中が大変な時代だとしても安くはしません。

佐多：龔さんの話を伺っていると、まさに「愛と生命」という言葉を実感します。実は我が社は「生命力」を経営理念にしています。色々なものに生命力というものは存在します。会社も生命力が必要です。そのことを社員にも意識して仕事をしてもらいたいと考えているのです。

龔：私は多くの経営者の方々から支援を受けてきています。みなさん立派な方ばかりですが、10年位前にお会いしていた日本の経営者のほうが理念をお持ちになっていたように思います。社会あっての会社なのに、最近は会社ばかりになってしまっているというか。佐多さんが経営理念をしっかりと持っておられることは立派だと思います。

佐多：ありがとうございます(笑)。私も龔さんのように、「愛と生命」を実践していく人生にしたいものです。

(注) 親業訓練協会事務局

〒107-0062 東京都港区南青山7-10-3 南青山STビル2F

TEL：03-3409-8355 FAX：03-3409-8688

URL：http://www.oyagyo.or.jp/

ケニアICRCロピディン病院

スーダン紛争犠牲者救援医療活動に参加して

石川 清

アフリカ最大の国家スーダン共和国は、過去17年間、国の南部を中心に政府軍と反政府勢力、さらに反政府勢力同士の紛争が続き、いまなお南部および東部スーダンでは散発的戦闘が報告されている。この国内紛争と干ばつによる食糧事情の悪化とで、現在でもスーダン国内では150万人以上の難民がキャンプ生活を強いられるとされ、軍人、一般市民を含んだ紛争犠牲者の数は依然として減少しない状況にある。

赤十字国際委員会(ICRC)は、1969年からスーダン紛争による負傷者の救援活動を開始し、1987年には、ケニア国内のスーダン国境沿いにあるロキチキオに紛争犠牲者のためのロピディン外科病院を開設し医療援助を続けている。今回、私はICRCの要請により、2000年10月から3ヶ月間、同病院で麻酔科医としてスーダン紛争犠牲者救援医療活動(ミッション)に参加した。

ロピディン病院は、現在、ICRCによってすべて運営されている世界中でただひとつの病院で、最もよく組織化された病院である。ベッド数は560ベッドを有し、2つの手術室、ICU、術後病棟、10の病棟、機能訓練部門、滅菌室、レントゲン、給食、ランドリー、検査室、薬局等の設備も整っている。現在、各国赤十字社から派遣された18名の派遣員と約180名の現地スタッフが勤務している。各国派遣員は3ヶ月から1年の契約で交代するため、外科的な手技や治療方針には一定の基準が必要となり、すべてのスタッフが従うべきICRCのガイドラインが定められている。これは治療の一貫性を保つために不可欠で、現地スタッフはその一貫性を維持する重要な役割を担っている。

最近のロピディン病院の状況はかなりコントロールされていて、560ベッドのうち7割近くのベッドが使用されている。毎日、スーダンから搬送されてくる患者は数人程度で、時折このロキチキオ近辺から、重症の患者が同時に何人か運ばれてくることがあるが、それほど頻度は多くなく対応に苦慮することはない。2000年度の統計によれば、全入院患者は2,865人、そのうち戦傷外科に当たる外科系患者は1,039人で、うち銃による負傷が90%以上を占めている。それ以外の外科系患者は1,109人、内科系患者は576人であった。

スーダンからの患者はICRCや国連の飛行機でロキチキオまで搬送されてくるが、その距離は遠く、また、患者が搬送されるのは



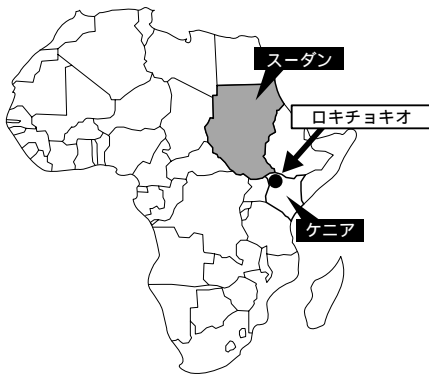
石川 清 / いしかわ・きよし

1947年 名古屋生まれ
1970年 名古屋大学工学部航空学科卒業
1977年 名古屋大学医学部卒業
1978年 名古屋市立大学病院 麻酔科助手
1986年 カナダトロント大学医学部麻酔科留学
1989年 名古屋市立大学病院 集中治療部助教授
1994年 名古屋第二赤十字病院 麻酔科・集中治療部長
現在 名古屋第二赤十字病院 副院長・救命救急センター長
名古屋大学医学部臨床教授

天候、スーダン側の飛行許可等色々な制約があり、受傷してから病院に着くまでに何日もかかることも稀ではない。そのため受傷部位は古く感染を伴っていることが多く、結果的に四肢切断手術が必要となることが多い。来院時に重篤な病状の患者が少ないのはスーダンからの搬送に時間がかかり、重篤な患者はスーダン国内ですでにトリアージされた結果、病院までたどり着けないことによる。実際にスーダン国内で治療を受けることなく死亡している患者の数は推し量ることができないが、恐らく相当の数であろうと思われる。その反面、病院に搬送されてくる患者は、助かる可能性の高い若い患者がほとんどであることから、病院内で死亡する患者は少ない。患者の疾患については、銃による外傷で創部のデブリッドメントを必要とする患者、四肢切断を必要とする患者、やけど、腸閉塞、ヘルニア^{ヘルニア}、帝王切開を必要とする産科救急、蛇やワニに噛まれた傷、破傷風等のほか、内科疾患としてマラリアを始めとした熱帯病も時々見られる。日本ではとても経験できない疾患ばかりで、こんな世界があるのかと当初は驚きの連続であった。

これらの外科系患者の管理には2つの外科チーム(外科医、麻酔科医、手術室看護婦)、senior surgeon、現地スタッフが当たり、各外科チームは1日おきにオンコールを担当し、オンコールの時に診察した患者を受け持ち、手術、術後管理を担当する。このメンバーで2つの手術室にある4つの手術台を用いて毎日約20件の手術を行う。外科チームは原則として各患者に対して週1回の術後回診を行うが、毎日数十名の患者を短時間で診察し、治療方針を決定して指示を出さねばならず、外科チームには豊富な知識と経験が要求される。

麻酔科医としての業務内容は、救急患者のトリアージ、周術期管理、麻酔担当の現地スタッフの教育・管理のほか、術後患者の疼痛管理、輸液管理などである。現在、ICRCの病院で行われている麻酔方法は、最近日本ではあまり用いられない方法が多く、ケタミン麻酔、ブロックを含めた局所麻酔、脊椎麻酔、ハローセン・



笑気を用いた吸入麻酔等に限られ、ほとんどの麻酔はケタミン麻酔あるいは局所麻酔である。吸入麻酔を用いるのは、小児麻酔、開胸開腹術、開頭術等に限られ、頻度としては20%以下である。ケタミン麻酔が最も多い理由は、簡単、安全、安価という点からである。術中のモニター機器は、血圧計、パルスオキシメータしかなく、原則として静脈確保のためのカニューラの挿入のみ行い点滴は行わず、多くの場合術中・術後とも酸素は使用しない。当初、この麻酔の方法には戸惑ったが、やっていることはベーシックなことなので、やり方、使っている薬さえ分かれば、ICRCの原則『simple and safe』を実行すれば良いのでそれほど難しくはなかった。同様にICU管理についてもICRCのpolicyがあり、使用する薬剤、医療機器については一定の基準を設けている。ICUの薬剤は非常に限られたものしかなく、酸素はあるが、それ以外の人工呼吸器や輸液ポンプなどの医療機器は設置していない。ICRCの病院では人工呼吸器は保有しないが、その理由として人工呼吸を必要とする患者は当然それ以外の集中治療が必要となり、その結果、病院の資源の多くを費やし、ICRCの基本的な医療のみを行うとする方針に反することになる。人工呼吸器がないことは、どこまで治療を行うかを決定する便利なカットオフポイントとして役にたつとの考えである。ICRCのpolicyは、患者に完璧な医療を提供するのではなく、むしろ基本的な医療を提供することであり、また、限られた患者だけを治療するのではなく、多くの患者にできる限り最善の医療を行うことである。このpolicyは、われわれの災害時に行う災害医療に通じるもので、実際、今回の経験がもし日本に役にたつとすれば災害の時であろうと思われた。

このICRCのpolicyに従って医療を行う上で感じたことは、日本の医療とロキチヨキオの医療の違い、スーダンの人の命の価値は日本人の何分の1に当たるのか？ここでは医療過誤も裁判もなく患者が文句を言う機会もない、日本のあの高額な医療は何なのか？患者はどういう思いでわれわれを見ているのだろうか？等々疑問に思うことは沢山あった。

3ヶ月間のミッションは決して楽であったとは言えず、日本人は誰もいない、現地スタッフや各国派遣員と英語しか通じない、1日おきのオンコール、連日35～40の気温、3ヶ月間休暇はなく、休



ICUの回診の様子。右端が筆者

みは日曜日のみ、何もないところで麻酔・集中治療をすること、金網に囲まれたコンパウンド(居住区域)と病院以外にはどこにも行けない、マラリアだエイズだエボラだとのわからない病気が蔓延している、等々、非常にストレスの多い毎日であり、派遣当初はこのストレスはかなりこたえた。ストレス解消のために、テニスコートがあることを事前に知っていたためテニス道具一式を送ったのは正解であった。幸い何人かのテニス仲間にも恵まれて、ほとんど毎日テニスをするのができストレス解消に有効であった。また、各国派遣員、現地スタッフと毎日の仕事以外にパーティーなどで楽しい時を過ごす機会もあり、多くの親しい友人がで3ヶ月間を十二分にエンジョイできた。一言でいえば『大変であったが楽しかった』というのが今回のミッションの印象である。

災害医療には『善意だけでは災害救護はできない』という言葉がある。これはいくら善意、熱意があっても、十分訓練された技術、能力がなければ、実際の災害の現場では、邪魔になるばかりで真の災害救護はできない。同じことがミッションにも言え、『熱意だけではミッションはできない』。3ヶ月という非常に限られた短い期間に有意義なミッションを行うためには、十分準備をした上で臨む必要があり、熱い思いだけではミッションはできない。仕事、仕事以外を問わず各国派遣員や現地スタッフと十分なコミュニケーションを保つためには、十分な語彙力をもち会話が何の支障なくできることが必要であり、また、事前に病院で使用される特殊な略語や用語、戦傷外科の基本、ICRCのスタンダード等をすべて理解しておくことも必要となる。

終わることのないスーダンの紛争は、平和な日本にいてはとても想像ができない世界であった。スーダン紛争犠牲者に対する救援は、スーダン生命線作戦OLS(Operations Lifeline for Sudan)と呼ばれ、ICRCのほかUNやNGOなど多くの組織がこの活動にかかわっている。国際救援に行きたい意志があっても、実際にこういった活動に参加するのは非常に難しく、赤十字病院にいないればこの機会はなかった。今回、3ヶ月という非常に短い期間ではあったが、若い頃からの国際救援に対する熱い思いを実現できたことは自分自身にとって非常に幸運であった。この経験を若い人達に伝えることが私の重要な使命だと思っている。

生きています シャントバルブ(注)と共に

——母と息子の闘病記——

山本 順子

平成12年5月、脳外科病棟の窓から見える新緑の木々は、日を追うごとに濃さを増していました。当時26歳の息子は、病院的ベッドの上で、大波のように襲いかかる激しい頭痛に身をよじり、声を押し殺すようにうめいていました。こうして、次の痛み止めの注射を打ってもいい時間がかかるのを待つのです。既に1ヶ月もこの痛みに耐え、体重は10キロも減りました。一つ一つの音が頭に響くので、耳栓を使用し、会話をするにも声をひそめなければなりません。その上、光がまぶしく、いつも目の上にタオルをのせていました。臭いにも敏感で、魚や醤油などの臭いはそれだけで吐くのでした。仙骨部分にできた褥瘡しよくそうは、みるみる広がりました。褥瘡部分への除圧のため体位交換をしたいのですが、横を向かせると吐き気が襲います。無呼吸発作も回数を増し、その都度、体を硬直させ意識を失う息子を見るのは辛く、このまま意識が戻らないのではないかとさえ思いました。担当医の懸命な原因追求や治療にもかかわらず、息子の持病である「二分脊椎」や併存する「水頭症」と複雑な合併症は、頭の中で荒れ狂っているかのようでした。

私は、仕事も長期休暇をいただき、家庭のことも夫に頼んで息子の看病についたのですが、ただおろおろするばかりで、できることはほんのわずかしかなかったませんでした。全力で生きようとしている息子の前では涙をこぼさないこと、それだけで精一杯でした。私はやつれ果て、髪は伸び放題、いつ寝ていつ食べ、いつ着替えたのやら。気が付くと、体力や気力の限界を超えていました。

そんな日が続く、梅雨の蒸し暑い夜中のことでした。無呼吸発作から醒めた息子は、「僕、もう十分闘ったよね。治療はこれで終わりにしたい。家に帰る」と訴えるのでした。私は息子としっかり目を合わせ、ゆっくりと大きくうなずきました。これは、息子が「このまま天国への早道を選んだ」ということを示す二人の暗号のようなものでした。私は息子の頭を幼子のように優しく撫で、彼が浅い眠りにつくのを待ってトイレに駆け込み、水を流しながら慟哭どうきくしました。その後洗面所で、長く汚れた髪の毛を左手で束ねて、右手で一気に切り落としました。鏡の前で、背筋をしゃんと伸ばし、笑ってポーズをとってみても、一気に噴出した涙はいつまでも止まりませんでした。

翌日、「一度でいいから家に帰してください」と切望する息子に、担当医は、「病状が急変したら夜中でもかまわないからすぐに来な



山本 順子 / やまもと・じゅんこ

1951年宮崎県生まれ。地元の県立高校を卒業、結婚、22歳で母親となる。子育てをしながら、1983年より福祉施設に勤務。保母、社会福祉主事、ケアマネジャーの免許を取得。健常者同士では味わえない貴重な経験をつづった文章が日本一に輝き、脚光を浴びる。現在、社会福祉法人巴会ヘルパー派遣センター所長。宮崎市の自宅で両親と夫、子どもの6人暮らし。

さい」とおっしゃってくださいました。私は黙って頭を下げました。

早速、退院の手続きを済ませ、息子の頭痛の波が静まるのを待って、我が家への帰途につきました。夫の運転する車は、息子が元気だったついひと月前までは、彼自身の運転で彼の職場である体育館まで通った道でした。私は、ゆっくり走る車の中から、見慣れた風景を息子に話るのでした。

自宅での息子は、好きな物から少しずつ食べ始めました。(生きられるかもしれない)と希望が湧くと、私の心の底から「このまま死なせてなるものか」という気持ちが突き上げてくるのでした。

そんな折、「日本二分脊椎・水頭症研究振興財団」から、神戸の医師を紹介していただきました。早速、神戸と宮崎の医師による慎重な協議の末、飛行機と救急車を使った搬送による入院が決まりました。医療を拒否していた息子が、神戸に行く決心をしたのです。それは、息子自身が、電話で話をしてくださる神戸の医師の、穏やかな口調、納得がいくまで行う説明、そして徹底した患者本意の姿勢に、運命の全てを賭けられると思ったからだそうです。平成12年夏、こうして私たち親子3人は神戸に向かいました。死にもの狂いとは、こういうときのことを言うのでしょうか。ひたすら助けたいという一念が天に通じた気がしました。

無事神戸に着くと、診察や検査が行われました。先生は、私たちの話す病状経過や痛みの訴えをしっかりと受け止めてくださいました。そして、今までの総合的な情報を集約、整理され、じっくりと考えられた末に、「手術しましょう」と言い切られたのです。一番に考えられる原因は、水頭症の悪化だろうということでした。水頭症とは、脳脊髄液の吸収がうまくいかず、頭蓋腔内に脳脊髄液が過剰に貯留する病気です。頭蓋骨の大きさはほぼ決まっていますので、頭蓋腔内の脳脊髄液の増加はやがて脳を圧迫し、さまざまな障害を生むだけではなく、やがて死に至るといわれています。



息子は脳脊髄液が貯留し、かなり脳の圧迫を受けていました。そこで、脳室内にシャントバルブを入れ、余った脳脊髄液を腹腔に流して、脳圧を正常に保つ手術を行うということでした。シャント手術だけで脳圧を正常に保てないときは、小脳部分の骨を削るキアリー手術も実施する計画でした。先生は、「手術は明日4時に開始しましょう」ときっぱりとおっしゃられました。息子を早く楽にしてあげたいから、と聞いても、体の震えは止まりませんでした。私は、手術自体が不安だったのですが、先生は手術時間までの病状急変を恐れておられました。それでも先生は静かな調子で、息子の心を押し量りながら、写真を見たり図を書いたりして、手術や治療の進め方、シャントバルブの有効性、また、手術の苦痛やリスクなど、十分過ぎるほどのインフォームド・コンセントをしてくださいました。話の端々に出る、「患者さんの気持ちが最優先です」「他に質問はないでしょうか」などの思いやりのある言葉は、私たちを安心させてくれました。息子は、「元気になるためならどんなことでも我慢できる。何が起きても、僕は先生を信じて手術を受ける」と覚悟を決めたようでした。息子は、頭の毛を全部剃り、手術着に着替え、予備麻酔の後、ストレッチャーの中から片手を挙げ精一杯の笑顔をつくって手術室に消えていきました。

先生は「治す」という執念を込めて、息子の頭の中にシャントバルブを埋め込んでくださったのでしょうか。シャントに、命が吹き込まれました。息ついたシャントは、生きたいと叫ぶ26歳の体内にすんなりと受け入れられ、拒否反応もトラブルも起こしませんでした。70mmHgにセットされたシャントは、息子の中核に納まり、失われた機能の代わりに脳脊髄液のバランスをとり始めたのでしよう。嵐のような痛みは、まるで夢を見ていたかのように鎮まりました。彼は、「痛くてたまらなかった虫歯を抜いたときのようにすっきり治った」と言い、調子づいて「シャント一発、リボタンD」とポーズをとり、声をたてて笑うのでした。いつもの息子の笑い方ってこうだったな—と思い出し、一緒にポーズをとりながら笑っているのに、涙がこぼれました。私たちは、それまでの寝不足をまとめて取り返すかのように、安心してよく眠りました。

8月、息子の状態が落ち着くと、軽快退院が許され、宮崎に帰る飛行機に乗り込みました。空は青く澄み渡り、真夏の太陽がまぶ

しく輝いていました。私は、もうすぐ会える家族の喜ぶ顔を思い浮かべました。

その秋には、息子も私も、元の職場に復帰することができました。昔と変わらない家族6人のつましく穏やかで、幸せな日々が流れていきます。息子はすっかり元気になりましたが、今までに私たちと同じように苦しみ、その当時の医学の力を総動員し、本人も生きることに執念を燃やしてもなお、亡くなられた方がたくさんいらしかったはずで。その方の苦痛や無念さを想像すると、私自身のことのように胸が痛みました。

そんなことを考えるようになった年明け早々に、「日本二分脊椎・水頭症研究振興財団」の紹介で、株式会社東機貿の「患者さんの声を聞く会」に出席させていただきました。東機貿は、シャントの輸入開発・製造販売を行う、全国に支店を持つ大手の会社だと伺いました。恐れ多くも光栄なことでした。知的で温かく熱意に満ちた会場で、息子は、シャントのお陰で再び生きることを許されたことへの感謝の気持ちを話しました。シャントを発明された方、改良に改良を重ねて尽力された研究者、医師、患者さん、また、息子の緊急手術に間に合うようにシャントを届けてくださった方、手術をしてくださった医師とスタッフ、全ての方々へのお礼でした。全国からお集まりの100名近い幹部社員の前で、これから生きることの意義を訥々と話す息子が一回り大人びて見えました。

帰宅後、約束通り東機貿の佐多保彦社長から、書物が送られてきました。そこには、シャントバルブを発明された脳神経外科医、「ロバート H. ビュデンツ博士」のことが書いてありました。日本に初めてシャントバルブを紹介されたのは、社長のお父様であり、そのお父様の功績があって、佐多社長に引き継がれていった、「人の命を支えるために、愛と知恵の結集」という東機貿の信念に感謝と尊敬の念が湧いてきました。

今私は、再び息子の母親でいられることに対して、天地万物に感謝し、心静かに暮らしています。息子は、いただいた27歳の命を存分に謳歌しながら、新しい世紀を着実に歩き始めました。

（注）頭蓋内圧を正常に保つために、頭皮下に埋め込み余分な脳脊髄液を体の他の部位へ流す小さなバルブ。

生命科学の時代の 科学と人間

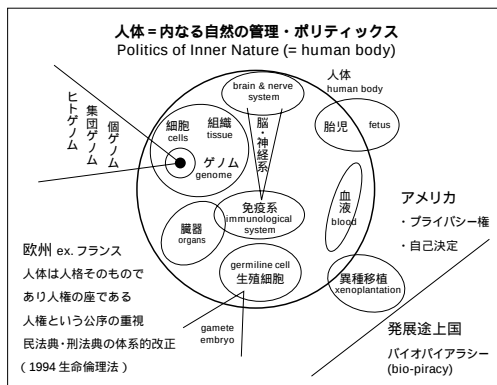
米本 昌平

1. フロンティアとしての「内なる自然」

21世紀は生命科学の世紀と言われる。事実、世界はこの分野に巨額の研究費を投入し始めている。たとえば1993～2001年のクリントン政権8年の間に、生命科学研究を所管するNIH(米国立衛生研究所)の予算だけが倍増した。そして90年代末には、ヒトゲノム解読が終了目前となり、哺乳類のクローンなど発生工学の分野でブレークスルーが起こった。ふり返ってみると、人類は20世紀を通して自らが住まう自然環境を研究の対象とし、その成果を利用してきた。その結果、生活条件は飛躍的に改善されたのだが、一方で、大規模な自然破壊も招いてきた。20世紀型の文明が追求した「外なる自然」の利用は、功罪あい半ばすると言わざるをえない。

新世紀に入ってわれわれは、自身の肉体である「内なる自然」をフロンティアとして改めて位置づけ、これを解明し、その産業化の可能性を考え始めている。しかしそれは同時に一般の人たちに、漠とした不安をもたらしている。具体的には、ヒトゲノムやヒト受精卵はどのような意味をもつか？ それはどこまでなら利用してよいのか？ このような倫理的課題に応えるための理論の体系を、われわれは未だ準備できてはいない。

一般の人たちは、DNAは生命の設計図だと繰り返し教えられてきた。だからヒトゲノムの解読は、個々人のプライバシーや人格そのものが暴かれてしまうことのように映る。だが研究者にしてみると、この比喻はもうかなり以前にリアリティーを失っている。高速の自動DNA解読装置がディスプレイにうち出してくる無機質なDNAの配列は、遺伝情報の広大な海原に近いものである。現在の事態と似た状況を歴史の中に求めれば、それは幕末の日本であろう。江戸時代には臍分け、つまり人体解剖はご法度であった。幕末期に西欧医学の導入によって、日本人は突然、自身の「内なる自然」の真の姿を知るようになった。この時、人間観がどう揺れたのかは定かではない。そういう問題意識で歴史をふり返ったことがないからである。ただし、その中で医学は、漢方から西欧医学へと大きく転換した。言ってみればわれわれは、新しい解剖学の時代に遭遇しているのである。



2. 20世紀型生命倫理の境界

20世紀後半に、「内なる自然」をフロンティアと位置づけ、技術的な応用の可能性を議論すれば、必ずそんなことはナチスの優生学へとつながるという批判がなされてきた。しかし考えてみると、これは歴史的記憶を倫理原理として代用することであり、時とともにその有効性是否応なく薄らいでいく。一方で、今や生命を操作する可能性は20世紀より格段に増しているのであるから、生命科学研究に対して新しい制御体制を考え出さなくてはならない段階にきている。

既存の思想が本格的な生命科学の時代に耐えられるのかという疑問は、生命倫理の研究分野においても頭をもたげている。生命倫理研究の領域は、アメリカのバイオエシックスがその中心を成してきた。ここで基本におかれているのは、身体をどう扱うかを決めるのは本人意志がすべてであるという自己決定の原理である。だからこそ、インフォームド・コンセント(十分な説明を受けた上での同意)の徹底が不可欠であると考えられてきた。そもそもこの原理は、人体実験の被験者の人権擁護の議論の中で確立されてきたものであり、その後、人体組織やゲノムの研究利用の場でもこの規制モデルが慣用されてきた。

しかし人体という「内なる自然」の細分化がますます進み、DNAの次元や、細胞内反応や、組織の相互作用や、発生過程が解明さ

米本 昌平 / よねもと・しょうへい
1946 名古屋市に生まれる
1972 京都大学理学部(生物化学専攻)卒業
1976 三菱化成生命科学研究所入社
現在 三菱化成生命科学研究所・科学技術文明研究部長

主な著書

『バイオエシックス』(講談社現代新書)
『先端医療革命』(中公新書)
『遺伝管理社会』(弘文堂)1989年度毎日出版文化賞受賞
『地球環境問題とは何か』(岩波新書)
『クローン羊の衝撃』(岩波ブックレットNo.441)
『知科学のすすめ』(中公叢書)1999年度吉野作造賞受賞
『優生学と人間社会』(講談社現代新書)

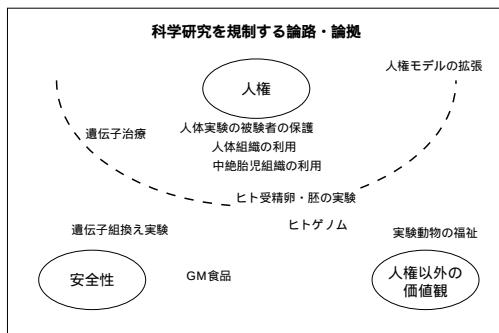
れていくにつれて、研究資料の利用は提供者本人の同意さえあればよいという考え方の限界が次第にあらわになってきている。その例が、提供者の同意さえあれば人間の受精卵を実験的にどう使ってもよいのかという問いである。ゲノムや他の人体組織も多かれ少なかれこの課題から逃れることはできない。これに関してはアメリカは、本人同意の原則で律しきろうとしているが、ヨーロッパ諸国では個人の意志だけではなく公的な秩序を重んじる傾向が強く出てきている。さらにヨーロッパは、生命倫理の原則を普遍的な価値として認めようとしている。たとえば、欧州評議会が立案した欧州バイオエシックス条約や、97年のユネスコ総会で成立し、国連総会でも承認されたヒトゲノム宣言がそれである。ヒトゲノム宣言は、その第一条は「ヒトゲノムは象徴的な意味で人類共通の遺産である」と明言し、ヒトゲノムを単なる巨大高分子の集塊とはみなさない見解を明らかにしている。

また研究の現場でも、SNPs(単一塩基多型)研究の場では個々人のインフォームド・コンセントを厳格にとり行うことは困難になる。そこで各研究施設の審査委員会の機能を変更し、その研究計画がプライバシー保護を確実なものにしているか、重要な科学的成果が期待できるかを審査させようとする方向が出てきている。インフォームド・コンセントは、研究内容を被験者の集団全体に説明し、拒否したい人だけが集団からはずれることを保証することにまで簡略化するのである。これを国レベルにまで拡大したのがアイスランドの例である(詳細は米本ほか『優生学と現代社会』講談社新書)

3. 新しい価値観の確立と科学研究の制御

われわれは、急拡大する「内なる自然」に関する科学的成果を、人間的に管理し、その利用を制御するための思想と制度を考え出さなくてはならない段階にきている。もしこれに失敗すれば、生命科学の時代の到来は同時に、生命観や身体観に関して耐え難い混乱を招くことになるだろう。一般の人たちの漠然とした不安は主にここに由来する。

そのために「内なる自然」に対する解釈体系を築き上げる必要があり、現代人の共通感情を探り当てなくてはならない。価値観や倫理の基盤は、結局は共通感情にあるからである。これは、表



面的なアンケート調査などでなかなか把握できるものではない。現代人の深層心理を掘り起こすという明確な目的をもって、洞察力をきかせた研究を設計する必要がある。それは、われわれがまだ言葉にしない未明の思いを言葉に移し替える作業であり、先進国社会における文化人類学的研究を組むことである。つまり、われわれは文明論的次元で曲がり角に立っていることをもってはっきり自覚すべきなのである。

それに加えて、公的資金によって行われる自然科学全体を究極のスポンサーである市民のコントロールの下におくための社会的な議論を開始し、そのための仕組みを考えださなければならない。20世紀では、科学をコントロールすることは、ナチスのような強権国家の仕業と考えられた。しかし今や、科学研究全体をシビリアン・コントロールの下におこうとする議論がふつと湧き起こっている。科学の研究成果は、ポスト工業化社会における人類にとつての最大の共有財産であり、同時に、人間的な未来社会を設計するために不可欠な情報源でもある。生命科学の時代は、科学と社会との関係が決定的に変化する時代でもあるのである。

表紙の写真

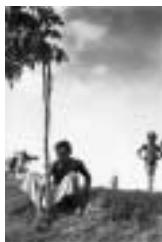


写真: クリス・スティール=パークINS
バングラデシュ, 1989年

世界でも極めて貧しく、人口密度の高い国バングラデシュ。常に干ばつや洪水と言った天災の脅威にさらされている中で、1988年9月、過去最大級の大洪水に襲われた。国土は壊滅的なダメージを受けたが、バングラデシュの国民はどうか自分達の手で復興の道を模索し始めた。復興を目指すバングラデシュの強い決意は、この年G7サミットで特別援助の合意に至らした。

表紙の写真は、バングラデシュの復興に向けての前向きな活動、洪水と戦うために、植林する青年。しかし、89年の9月に再び大洪水が国を襲ったとき、この努力は無に帰した。

パークINSの切り取る構図には、心理学的な画面の構成に合わせて、なによりも人間の存在と真摯に向き合う、一見距離感のあるその視線に、どこか温かさを感じずにいられないのは、そのせいかもしれない。

出会い (18)

宇宙の子守歌

奥村 一郎



1. 幸い

ちょっとした思いがけないことは、誰でも、どこでもあるものだが、ふとうれしくなって考えをめぐらすようなことがある。おやつ茶菓子ぐらゐのものかもしれないが、小さいマッチの頭の火から大きな炎になることもある。

少し前のことだが、東北の盛岡にしばらく滞在していた時のこと。NHKテレビの日曜番組「のど自慢」の時間で、ちょうど終わりの場面になるところ、演歌のタレント、小林幸子さんが、美しい衣装にきれいな声で歌い始めていた。美声とともに流れでるその時の歌詞に思わず耳を引かれた。あわてて、小さい紙切れにメモをしたので、少し間違っているかもしれないが、あとでも誰か教えてくだされば幸い。曲もついでに。

さいわいには ふたつの かたちがある
ねがいごとが かなえられたとき
それが ひとつのさいわいのかたち
そのつぎは ねがいごとなんか みんな すてっちまえ
それが ふたつめの さいわいのかたち

その時、ふと心に浮かんできたのが中世スペインの偉大な神秘家、十字架の聖ヨハネの言葉：「Nada(無)と Todo(全)」。『みんなすてっちまえ』の「無(Nada)」においてのみ、「全(Todo)」となる神に出会う幸いがあると聖者はいう。禅語の「無一物中無尽蔵」もそれにピッタリ。

にしても、偉大な聖者の教えと現代日本の演歌とは、宗教も文化も全く違う、あまりに縁遠い二人の世界。だが、人の心の奥底にある真理はひとつ。その真理のなかで二つの想いが結ばれても不思議ではない。七夕の美しい夜空に天の川を挟んで、牽牛織女が愛の契りを交わす場面を思い起こす。人間の真の幸福は、誰にとっても同じ、という素晴らしい現実をそこにも見るかのようであった。まさに、宇宙の子守歌を聞くかのような。

2. お洗濯

いつかのカトリック新聞に出ていた小話。

「すこしばかりの晴れ間を見て、急いで洗濯物を干しに出た。3歳の娘もあとからついてきた。『マリちゃん、お洗濯物が乾くまで

奥村 一郎 / おくむら いちろう

1923年岐阜県生まれ。48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。

著書は、『断想』『主とともに』『祈り』(女子パウロ会)、『わたしの心よ、どこに』(サンパウロ)、『聖書深読法の生いたち』(オリエンズ宗教研究所)など多数。

雨が降りませんように、いっしょにマリアさまにお祈りしましょうネ。きっと、聞き入れてくださるわ』といって、二人で手を合わせ『めでたし、せいちょう みちみてるマリア……』と一息懸命祈り始めた。すると、途端にポツリポツリと雨つゆが落ちて来た。一瞬、『ああ、どうしよう！……小さい娘に嘘をついてしまっ！』と、マリちゃんの方を見ると、『アッ！ お百姓さんが先に雨をお願いしちゃったのネ』と嬉しそうにいう。思わぬ答えにホッとして胸をなでおろした。見事なチビッコ神学者。動脈硬化になりやすい大人の頭に対し、柔軟な幼児思考の巧みな宙返りで自他ともに救われる見事さ。難しい大人の言葉でいうと、前者は実体神学、後者は関係神学。まさに、3歳のマリちゃんは、柔軟な「関係神学」を地でいった。ママさんは、自分のことだけしか考えない。マリちゃんの開いた心と頭は他人の必要に気付く広さがある。野球でいえば、ママはバットだけ握りしめて哀れな空振り。マリちゃんはタイムリーヒット。会ったこともないマリちゃんだが、あわれな大人の私の目を開いてくれたひと時。「親を育てる子供」という面白い題の本が出てきているが、こんな話がいくつももあるかもしれない。

3. 神様

やはり、また、新聞のなかの小話で、「神様」と題する面白い記事が目についた。

「5歳の息子が、バスケットボールで『NBAの神様』と言われたマイケル・ジョーダンの引退会見をテレビで見ていた。『見て見て、神様やって。へえー、神様って見えるんや。人間みたいやなあ。でも何言ってるかわからへんから、やっぱり神様や！』と感心していた」
 (「いわせてもらお」欄。朝日新聞、大阪版、1999年9月12日、日曜日 兵庫県加古川市、もちろん英語で会見していました。30歳)

前記の「お洗濯」の話にも似て、幼な子の思考にみる見事なまで



の弾力性に驚く。張り切れるボールのように、自由に思いが飛び跳ねる。寄稿されたお母さんは、どのように受け取られていたのかは正確に分からないとしても、この短い記事には、バスケットボール選手の手から手に飛び回るボールのように、「神」という言葉が目まぐるしく飛び交うのを見る。チビッコ神学の可愛い兆しかも。ドンと飛躍して、大人用の神学にきりかえれば、「見えない神が見える神になって」ビックリした坊やの言葉そのものが、「神人キリスト」という途方もなく難しい神学の扉をなんの苦もなく開いてくれる。また、それに、「何言っているかわからへんから、やっぱり神様や」という。これも理屈っぽい大人の神学者など足元にも及ばないのでは…。

4. 宇宙の子守歌

チビッコ哲学者(1)

決まっていなければならない

四年 岩月 美弥子

2+3=5 5+4=9

決まっていなければならない

決まっていけない世界！

空は、千色の色がまざっていて、

土は、九千色の色がまざっていて、

女の子は、おとなしく、しとやかに

なんて決まっていなければならない

もしそんな所があったらすつとんでいく

(聖母短大児童文学研究会)

しよっぱなから驚かされたのは、次の言葉。

2+3=5 5+4=9 決まっていなければならない 決まっていけない世界！

というのも、中世カトリックの大神学者トマス・アクイナス(1225 - 1274年)の「神学大全」という著書の中に、全く同じ問題がとりあげられているからである。2+3=5、さらに、円はいつも丸いというようなことは、不変の真理に違いない。しかし、その永遠性と普遍性は、その事柄自体の本質ではなく、永遠の神である創造主に由来するという。学問的用語でいうと、ひどく難しくなる事柄が、子供の瑞々しい発想と全く軌を一にする真理。単に、数字の偶然というだけのものではない。学者と子供、それも、東

と西との見事な出会い。さらにいえば、「天地は過ぎ去る。しかし、わたしの言葉は過ぎ去らない」という、キリストの言葉にも通じる(マタイ24、35)。まさに、子供の問いは、天にまでとどくといえよう。宇宙の果てにまですつとんでいく現代っ子。ジャンヌ・ダルクのような、男勝りの小さいやまと撫子。こうした子供がいる限り、わたしは日本の未来に失望しない。果てしない大空に咲く曼珠沙華を見る思い。神に栄光あれ！

チビッコ哲学者(2)

ぼくのした 5才 しまだのぞむ (口頭詩)

ぼくのした 「うごけ」といったときは

うごいたあとだ ぼくのしたを

ぼくよりききに

うごかすのは なにや

(聖母短大児童文学研究会)

まだ5歳の男の子、自己観察の可愛い芽生え。大人になると、およそ考えもしないことをみせてくれる子供の問いは微笑ましい。自分でやってみて、なるほどと思った。こんな何でもない小さなことを考えることから、大きな発見がなされることもまれではない。ニュートンと林檎の話は余りにも有名。すでに彼の何百年も前から、林檎はあり、毎年無数の実が庭に落ち続けたに違いない。だが、誰も重力の法則には気付かなかった。深い真理はありふれたことの中に隠されているらしい。

「ものが動く」という、至極当たり前の事実を凝視するうちに、「神の存在」を読みとったのは、前記の偉大な神学者トマス・アクイナスであった。運動の第一原因となるものは、自らは不動でありながら他者を動かすもの。存在についても同じ。卵と鶏とは、どちらが先に存在したのか？ その疑問は堂々巡り。「2は鳥」などとごまかしても駄目。難しい哲学用語では、「偶有的存在」と「必然的存在」の区別が必要となる。やさしく砕けば、「タタマあるもの」、「イツモあるもの」。前者は一時的、後者は永遠。後者が「神」といわれる。のぞむ君は、それは、「なにや!？」という。その「なにや」から、「誰や」の問いへ。人生の豊かさは、その問いの深さにかかる。

わが心の遍歴

(8) キリスト教と仏教について

花岡 永子

幼い時からキリスト教と仏教と儒教的雰囲気の中で育ってきた筆者は、今から振り返って考えてみると、キリスト者として、しかも禅に生きようになった過程は自分で良く頷ける。医師の祖父は厳しい儒教的な生き方をしていたし、祖母はキリスト者であり、その頃としては珍しい勉強好きの英文学科卒の英語教師として奴隷解放の英語の歌や賛美歌を子供の頃から幾つも教えてくれた。三歳の頃に既に立派な難しい大きな文語の新旧約聖書を贈られ、内容を全く理解はしていなかったが、お飯事^{おきりぎりす}にも、片仮名のイエスやヨハネの名を従兄弟やお友達と、何か不思議な気持ちで呼びながら、何時も楽しく使っていた。父は自然科学者であったが、祖父も父も曹洞禅を家の宗教として、世俗の中に生きてはいたものの、何処か道元を思わせる様な生活習慣を持っていた。祖父も父も亡くなってから、道元の著書を読んでいてハッと祖父や父の生活を思い起こすことがよくある。両者共に、一切の無駄を省いて、貧に徹して、どんな作務をも当然のこととして実に質実剛健に生き抜いていたからである。両者共に、身分や権力や富よりは自由な研究を喜び、戦争を嫌い、登山や暮やスポーツを好み、理屈無しの子煩悩であった。母は、祖母の影響で、洗礼は受けてはいなかったが、キリスト教的な生き方をしながら、祖父や父の禅をも受け入れる様な生活をしていて。母の祖父や父は、漢籍の研究者で儒教的な生活をしていたために、むしろすべての宗教を受け入れる様な宗教的な生活をしていて。第二次世界大戦中の、父が満州に出征中で生死不明の数年は、母はいつも田舎の神社やお寺に子らを連れて行って、殆ど何処のお寺にも神社にも最敬礼することを子らに強いた。何処の神様にも、仏様にも別け隔てなく、同じように最敬礼をして、生きていることへの感謝をしなればいけないというのが、小さい頃からの母の教育であった。母以外は、宗教のことは何も言わなかった。全く自由な雰囲気の中で育ち、どの宗教でなければいけないということは全く無かった。それで、大学に入学してからも、様々の宗教を自分なりに理解したり、訪ねてみたりして、色々と試行錯誤を重ねなければならなかった。人間としての生き方としては、大変有り難い教育を家庭で受け得たと思っている。大変困難な人生ではあるが、自分の判断でこの様な人生を歩まざるを得ない様な教育をしてくれた、今は既に亡き両親に対して、感謝の念に堪えない思いで一杯である。



花岡 永子（別姓：川村 永子） / はなおか・えいこ

1938年生まれ。'59年京都大学文学部入学。'63年同学部哲学科(宗教学)卒業。'68年京都大学大学院宗教学博士課程中退。西ドイツ・ハンブルグ大学神学部組織神学科博士候補生コース留学。'73年同大学より神学博士(Doktor der Theologie)の学位を取得。'87年女性老練家'96年には京都大学より文学博士号を授与される。京都大学、大阪大学、神戸大学他で哲学、宗教学、倫理学、ギリシャ語、ヘブライ語、ドイツ語などの非常勤講師を経て、現在大阪府立大学大学院人間文化科学研究科教授として哲学、宗教学を教える。

著書は『宗教哲学の根源的探求』(北樹出版、'98)、『心の宗教哲学』(新教出版社、'94)、『神と宗教哲学』(北樹出版、'94)、『キルケゴールの研究』(近代文芸社、'93)、『キリスト教と西田哲学』(新教出版社、'88)他多数。

1. キリスト教について

キリスト教が何であるかと言えば、一般的には、ヨセフとマリアの子である人間イエスを、人類の一人ひとりの罪を贖って死と律法から救い出し、「永遠のいのち」へと導く救い主としてのキリスト(救済者)と説く、世界宗教(普遍宗教)の一つであると理解される。そして、古い自己に死んで、キリストとしてのイエスの人格と教義に従って、キリストとしてのイエスに倣って、新しい永遠のいのちに復活し、聖霊に生かされて他者の魂の救済のために十字架を背負い、新しい「永遠のいのち」を生きることで理解される。しかし、イエスもキリストも、絶対無がこの現象界に表現されてきた一つの形であり、いわば絶対無の一種の「自己限定」(＝自己否定の形。例えば、濁流に呑まれた我が子の為に母親がその河の中に飛び込み、自らの命を絶ってその子を救う場合、それが本能的であろうと意志的であろうと、母のこの行為は母の母自身による「自己限定」であると言える)であることが、自らに自覚された場合には、人間の自己はそのような信仰の場に止まり続けることができるであろうか。絶対無の顕れないしは表現としての神とかイエスとかキリストという自覚が自らに自覚される場合には、人間の自己は、絶対的な人格としての神の底なき底とも表現される「絶対無の開け」(いかなる思惟の枠組みも設けられていない、道元の『正法眼蔵』で語られているような「非思量の思量」が可能となる開け)へと導かれて行くのではないであろうか。その導かれ方は、自らの意志だけによると見えようが、絶対の無限の開けからの開けの力だけによると見えようが、根源的にはそれら両者によってのものとして理解される。

そのような自覚が自らに目覚めてくるのは、それ迄の自らの神やキリストへの信仰が、自らの捏造した神やキリストへの信仰であったと自覚された時ではないであろうか。そのような場合には、神は、人間の思いを越えたところに開かれた、人格的であるのみならず、非人格的な次元にまで浸透していく力を備え、人格と非



新しい思想を模索するエラノス会議の1994年8月の講演者一同。
前列左から会長のホルヌング教授、筆者、副会長のシャーベイト教授。



シンクタンク大学であるアメリカのIOHD大学の日本校での名誉博士号授与式(2001年4月)。
向かって左からGeorge Morishita学長と筆者。

人格、人間的な倫理の次元での善悪や正邪、有と無、聖と俗、事と理の二元性を越えた、しかも三位一体的なあり方をすら越えた、一切の二元性、両極性を越えた、それらの根源に開かれた次元での働きを可能にする働きそのものと理解されるのではないであろうか。上記で今、キリスト教から禅仏教に開けて行く場合を想定して語ったが、「逆もまた然り」と言えるのではないであろうか。禅仏教からキリスト教へ出て行く方向も、勿論可能であり、その様な人生を送っている方々も多々見られるからである。また、一切の二元性、両極性の根源としての「絶対無の神」に生きようとしている自己が、そのような深みないしは深淵から出て来て、絶対無の開けが現象界に形を取った世界に生きることこそ自らの生の使命を感じる場合も勿論あり得ると考えられるからである。

両者の場合は、これまでも幾度が出てきた五つの思惟や思索のパラダイム(相対有、相対無、絶対有、虚無、絶対無)で理解すると、もっと分かり易くなると思われる。相対有(現象界)をパラダイムとする立場は、絶対視されれば唯物論となり、絶対視されない場合には他のパラダイムのいずれか一つないしは幾つかが絶対視される方向へと動いて行く。相対無のパラダイムの立場は、絶対視されれば実存思想や実存哲学となり、絶対視されない場合には他のパラダイムのいずれか一つないしは幾つかが絶対視される方向へと動いて行く。絶対有のパラダイムの立場は、絶対視されれば、ハイデッガーが批判するような古代哲学のソクラテス以来ヘーゲルに至る西欧の伝統的な形而上学におけるイデア(idea、原型) ウジア(ousia、本質) エイドス(eidos、形相)そして実体的な(=永遠で、普遍で、変わらざる、全知・全能の)神(theos)を核心とするような絶対有の神を核心とする神学や実体的な哲学となり、絶対視されない場合には、他のパラダイムのいずれか一つないしは幾つかが絶対視される方向へと動いて行く。絶対無のパラダイムの立場は、本来自らのパラダイムの立場だけを絶対視することのないパラダイムである。だから、もし絶対無のパラダイムの立場だけが絶対視されれば、この立場はもはや絶対無のパラダイムの立場ではなくなる。というのも、「絶対無」の「絶対」は、絶対の自己否定を意味し、この自己否定によってこそ自らの慈悲(愛)の働きとしてのあり方(=無)を生かすことができるからである。

以上の意味において、禅仏教に生きるとは、自らはどのパラダイムをも絶対視することなく、ただ絶対無以外の四つのパラダイムの立場をケース・バイ・ケースにすべて認めながらも、同時に絶対無の生かされる生き様である、各々の場合に生かされ得る慈悲(愛)の形を全身全霊を懸けてひたすら工夫することを意味することになる。そして、そのような禅仏教の生き方からキリスト者として、例えば祈りの対象であるような絶対的人格としての絶対有の神に対しての信仰に回心することは、絶対無以外の四つのパラダイムに同時に慈悲を裏打ちすることではなく、絶対有のパラダイムの立場に全身全霊を懸けることを意味することになる。

2. 仏教について

仏教は、一般的には、人々が「苦」から修行(八正道)によって救済され、真の自己に目覚めると説く、世界宗教の一つで、それは、利己的に生きるエゴ(自我)に死して、真の自己が目覚めて、他者が真の自己になる救済のきっかけ(契機)となる教えを説くとして理解されている。そこには仲介者はなく、仏性は自己の自性で、両者ともに無性(無実体)である。しかし、キリスト教も仏教も、絶対無の表現としての神や仏を越えた両者の「根源の開け」が経験され、それが表現され、制度化された普遍(世界)宗教であると理解され得る。しかし、絶対無が表現されるときには、各時代・各民族・各国家等における文化が大きな役割を演じ、その表現形態としての各宗教は相互に全く相違していると言える。

そのような相違の中で、例えば、筆者のようにキリスト者が同時に禅仏教に生きることになるという事実は、キリスト教のみを絶対視していた自己が、キリスト教の神の更なる深淵での根源的宗教経験が一切の世界宗教における一であることを自覚し、更に五つのパラダイムの立場が各々中心であると同時に周辺であることを経験したからであると言える。

初めてのブルゴーニュ

——ソムリエの旅行記——

横山 弘和

初めての海外旅行

今年は西暦2001年、私がブルゴーニュを初めて訪れ、ブルゴーニュ・ワインと親しい関係ができた1971年から数えると、ちょうど30年という年月が経ったことになりました。

当時私が勤務していたホテル・オークラは、時代のニーズにマッチする新しい感覚のホテルとして大好評を博し、加えて1964年東京オリンピックの影響で外国人客も増え、営業は奇跡的と言われるほどの好成績を上げていました。そこで、新しくホテル業に手を出す企業が現われ始め、ホテル・ブームが起こったのです。結果として、業界で経験あるホテルマンの人手不足が深刻になり、新しいホテルでは、既存ホテルから即戦力となる人材獲得のためのスカウト合戦が始まりました。私も、当時まだ数少なかったソムリエの一人として、好条件で引き抜きたいとの誘いを受けました。一方ホテル側も辞められたくない社員の引き止めに乗り出し、私にも「なにか特別の希望があれば、かなえる用意がある」と上司からの申し出がありました。私は、これからもっと普及していくであろうワインを扱う仕事を続けさせてくれること、そして、ワインをサービスする仕事で大成するために、本場であるヨーロッパの国々で、ワイン生産とホテル・レストランでのサービスの実態を体験するための、海外研修の希望を上司に伝えました。上司は大変もったもなしな話だと、ホテル・オークラの野田社長(当時)に推薦すると約束してくれました。私は期待に胸を膨らませ、返事を待ちました。

日を経ずして野田社長が役員会で、ソムリエをヨーロッパで勉強させるのは将来のために大変重要だと発言されました。私は、その頃開業準備中だったホテル・オークラ・アムステルダムの手伝い、昭和天皇がオークラ・アムステルダムに来館される際の接遇、西ドイツ(当時)日本大使公邸で催される西ドイツ大統領をはじめとする要人を招待する晩餐会での手伝いの後、フランスでの研修に行かせてもらうことになりました。その上、野田社長は、ヨーロッパ研修の後、アメリカを回り主要都市の高級ホテルの視察を行った上で帰国するようにと、有り難い配慮を下さいました。生まれて初めての海外旅行が地球を一周する大旅行になった私は、嬉しさに天高く舞い上がるような気持ちでした。

1971年9月15日13時25分、羽田発モスクワ経由、アムステルダム



横山 弘和 / よこやま ひろかず
1930年兵庫県生まれ。65年ホテル・オークラ(東京)入社。95年に退社するまでソムリエとして30年間一貫してワイン関係業務に従事する。88年11月ブルゴーニュ・シュヴァリエ・デュ・タートヴァン(利き酒騎士)叙任。現在佐多商会業務室在籍。

行きKLM機で出発する私を、上司、同僚、家族、親戚まで、現在の海外旅行の気軽さと比べると、考えられないほどの大勢の見送りをうけ、大騒ぎの中旅立ちました。飛行機に乗るのも初めてだった私は、眼下に広がるシベリアの森林地帯を飽きずに窓越しに眺めながら、とうとう一睡もせずに約9時間後にモスクワに到着、さらに飛ぶこと約3時間、ようやくアムステルダムに到着しました。アムステルダムで、私の任務として予定されていた、天皇・皇后両陛下ご来館の際の仕事も無事終了後、次の西ドイツでの任務までの約1週間を、この時期フランスで始まっている、ぶどうの収穫の見学に充てることにしました。

フランスへ

9月28日に、私は、空路パリに向かいました。そして、オルリー空港に降り立った私は、バスでダウン・タウンに出てからターミナルでタクシーに乗り継ぎ、サン・ラザール駅の近くにあった、ホテル・オークラのパリ事務所にたどり着きました。そして、有名なブラザ・アテネ・ホテルの総支配人を長年勤め引退した後、ホテル・オークラの事務所長をしておられたジョルジュ・マラン氏を訪ねました。同氏は、私のフランス国内での研修の日程から研修先まで、全てのプランを立ててくれる人物なのです。氏は常に、ホテルのワイン担当者はぶどうの栽培から収穫、発酵、セラーでの作業など、ワインの造られる過程の全てに精通してはじめてワインの心が分かるのだと、まるで日本人の精神論のようなことを言う面白い人でした。そして近くのホテルに1泊した翌日、リヨン駅から特急「ミストラル号」でリヨンからアヴィニオンに至るローヌ河の兩岸に広がる、コート・デュ・ローヌと呼ばれるワイン産地に向かいました。

途中ディジョンを経て、南へ南へと走る列車は、ニュイ・サン・ジョルジュ、ボヌ、ムルソーとブルゴーニュ・ワインの産地を通して行きます。リヨンを過ぎヴァランスで下車後、近くのタン・レルミタージュという町の、ボール・ジャブレ社という歴史の長い名門ワイン生産者を訪ねました。そこで、熟したぶどうがどんどん摘み取られ、運ばれ、発酵樽に投げ込まれて活発な発酵状態が始まるまで、一部始終を見学しました。日本でも秋に山梨のぶどう園に出かけ、取り入れ作業を見たことがありますが、規模や量の



ルイ・ジャド社カーヴの入口

差を考えると、日本でのそれはまるでまごごのようなものでした。そして、こんな経験ができたソムリエは、当時まだ非常に少なかったことを考え、幸運に感謝しました。

ブルゴーニュへ

西ドイツでの昭和天皇主催の晩餐会での重要な任務を終えた私は、フランクフルトに飛び、当時日本で非常に人気の高かったライン、モーゼルのワイン産地を体験した後、正式な研修のため、再びフランスに飛び立つことになりました。一旦アムステルダムに戻っていた私は、10月16日、ちょうどパリからオークラ・アムステルダムに帰られた野田社長をメインロビーに出迎え、これからフランスに出かける旨を伝え、元気で行ってくるようにと激励を受け、同時に、パリでのサービスの素晴らしさを東京に持ち帰ってくるようにとの言葉をいただき、ますます責任の重さを感じました。

10月17日、パリから列車で、その後何度も訪れることになるブルゴーニュ・ワイン産業の中心、ボヌヌ駅に降り立ちました。10月のボヌヌの町は、ぶどうの収穫も終り、カーヴでは発酵が終った新酒が樽やタンクに注ぎ込まれ、引きの作業が始まっていました。新しいワインは、そのタイプによって違いますが、こくのある赤ワインともなると1年半の熟成の後、瓶詰めされ出荷されます。11月に催される年中行事「栄光の三日間」などの収穫祭の前で、町は静まりかえっていました。当時の日本でのフランス・ワインの輸入状況は、ボルドー・ワインが主流で、ブルゴーニュ・ワインは出遅れている感がありました。ドメヌ(注2)も日本を取引先として重要視してあらず、日本から来た訪問者に対する応対も行き届いていないため、戸惑うこともありました。その後の、わが国でのブルゴーニュ・ワインの人気の高まりは予想もできませんでした。ちなみに、10年後の再訪問の際には、うってかわって大歓迎を受けました。

最初の訪問先は、ブルゴーニュ・ワインの数あるドメヌの中でも評価が高く、当時日本にも製品を輸出していたルイ・ジャド社です。同社の社長アンドレ・ガジェー氏の案内で、ジャド社が所有するぶどう畑やカーヴの見学を行いました。しかし、ぶどうの実実は全て摘み取られ、黄金色に紅葉した葉っぱだけが、コート・ドール(黄金の丘)と呼ばれるこの地方独特の景色を彩っていました。



シャトー・クロ・ドゥ・ヴージョ(注1)

次に、ジャド社と肩を並べるほど評判がよく、輸出に力を入れているルイ・ラトゥール社を訪問し、地下深く掘られたカーヴに案内されました。カーヴの温度は、一年を通じて摂氏14度前後に保たれています。古い石壁や天井には、長年にわたって黴がべとりと付着し、それがワインの熟成に役立つことなどを説明されました。まさに、優れたブルゴーニュ・ワインがこの静かな環境で眠り、時と共に熟成していくのだと納得のいく思いでした。そして、樽からスポイトでワインを汲み出し、新酒から古いヴィンテージまで色々と試飲しました。以前どこかで聞いた、どんなお酒も出来たところで飲むのが一番おいしい、という言葉をも思い出しました。同時に、ワインを造る人々が、それぞれ自分の信じるワイン造りの哲学を持っていることに感心しました。

ボヌヌでの研修は短期間でしたが、ブルゴーニュ地方が、いかに世界でも類を見ない優れたワインの産地であるかを認識するには十分な日程でした。そして、私のブルゴーニュ・ワインとの長い付き合いが始まった最初の1ページとなったのです。

(注1) 元シトー派修道院の迎賓館。シュバリエ・デュ・タートヴァン(利き酒騎士)の本拠。

「栄光の三日間」には、利き酒騎士の叙任式と大宴会が行われる。

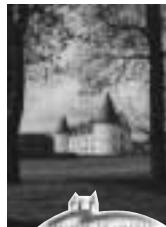
(注2) ブルゴーニュで、ぶどうの栽培からワインの醸造まで行うメーカーのこと。ボルドーでは「シャトー」と呼ぶ。

ブルゴーニュへ、 ようこそ

中世が、ほだに息づいている
ブルゴーニュへいらっしゃいませんか。
極上の銘酒を生み出すぶどう畑、
グルメレストランの数々、中世そのままの街なみ、
美しく広がる大地や、小さな村々、
豊かな生命力が「ほだのぬきり」を感じる地方、
それがブルゴーニュです。

お問い合わせ
(株)佐多商會業務室 担当: 岩沢
Tel. 03 3582 5087

Château de Chailly / シャトー・ド・シャイイ



ホームページ
(<http://www.chailly.com>)